

9月例会は「恋するトマト」

5周年記念上映会はなんとか終了

例会のお知らせ

名称 / 第32回例会 「恋するトマト」

日時 / 2007年9月19日(水) PM1:50~、PM4:10~、PM6:30~

場所 / 加古川総合文化センター大会議室(JR 東加古川駅から北へ徒歩15分、車は加古川バイパス加古川東ランプ北へすぐ)

受付 / 入会手続きが終わっている方は、受付に同封の「例会参加券」をお渡しください。

入会手続きを行っていない方は、受付で4箇月分の会費(2000円)を支払い、入会手続きを終えてから、「例会参加券」をお取りください。

【例会作品データ】

タイトル / 恋するトマト

監督 / 南部英夫

製作総指揮 / 大地康雄

出演 / 大地康雄、アリス・ティクソン、富田靖子、村田雄浩、ルビー・モレノ、織本順吉、いまむらいづみ、でんでん、阿知波悟美、あき竹城、石井光三、アレックス・アルジェンテ、アリエル・バルド、清水紘治、藤岡弘

データ / 2005年、日本、カラー、2時間6分、16mm、

ジャンル / ドラマ、ヒューマン、ロマンス、コメディ

解説

名峰、筑波山を望む、霞ヶ浦周辺に広がる美しい田園地帯。まばゆい陽光の降り注ぐフィリピン・ラグーナの村。「恋するトマト」は、二つの土地を結んで、切なく愛おしく、日本人の中年男性と美しいフィリピン人女性が恋を紡いでゆく、アジアン・ネイチャーなラブストーリーである。

親孝行で気の優しい45歳の独身男性の正男は、農

家の長男ある。これまでに何度も見合いをしたが、断られ続け、やがて、見かねた農業仲間の紹介で、フィリピンパブで働くリバティと交際を始める。そして、リバティに引っ張られるように二人は結婚することに。フィリピンに渡っての結婚式のはずだったが、正男を待っていたのは、結婚詐欺の辛すぎる現実だった・・・。

主演、企画、脚本、製作総指揮の大地康雄、10年越しの執念の作品でもある。

5周年記念上映会の報告

8月18日に加古川市民会館中ホールで、5周年記念事業として「フラガール」の上映会を行いました。今年の夏を代表する酷暑の日でしたが、約600人にご来場いただき、なんとか終了ことができました。ありがとうございました。

この作品は、2006年の日本映画を代表する作品です。廃れゆく炭鉱の町での、家族や仕事や土地に対する愛情と、少女たちの夢と元気を強く感じさせるもので、素晴らしい脚本を丁寧に作りあげていたものでした。

午後2時からの上映は、映写機音声不調のため上映開始が25分遅れてしまいました。会場にいた皆様には、ご迷惑をおかけいたしましたして申し訳ありませんでした。深くお詫びいたします。

昨年の栗塚旭さんのときは、姫路バイパス大渋滞で到着が遅れたのに続いて、今年もハプニングが起り、忘れられない上映会でした。

会場には、監督の李相日さんをお招きし、充実したお話を聞くことができました。主人公はあくまで炭鉱の町の少女たちであることや、役者にはフラダンスをきちっと踊れることを要求するなど、作品に対しては、頑固なまでに、妥協をしない姿勢がよく

伝わってききました。また、キャスティングも、新人の蒼井優、ベテランの富司純子の起用や、豊川悦司



や松雪泰子の魅力をうまく引き出したようにうまく伝わってきました。外見は1974年生まれのふつ々の若者といった印象の監督ですが、映画に対しての姿勢は、全くぶれない芯の強さを感じました。今後の活躍を心から期待しています。



李相日監督作品「Border Line(ボーダーライン)」

最近、忙しいことと、夏休みは子どもが多いので、何となく映画館に行くことが無かったのです。そんなときに、李相日監督が、加古川にやってくるということなので、どんな作品を撮っているのが気になり、レンタルビデオショップで「青(chong)」(1999)、「BorderLine」(2002)、「69(sixty nine)」(2004)を借りて、まとめて見たのです。

驚きました。そして、20歳代でこれらの作品を撮ってしまった監督への興味も深まりました。

最近の映画は、映像だけにこだわったり、エンターテインメント性を強調したり、果ては、お笑いスターによるまとまりのない空想劇など、あいまいで荒っぽい作品(それはそれで好きなものもありますが)がよく目につくと感じていました。そんな中、李監督の作品は、テーマがはっきりしていて、ひとつひとつの映像や台詞もきちっとしようとしているのです。主人公の設定に、大きく違いはありますが、それぞれの時代、身近にある世の中の表面に出にくい影の部分、監督のフィルターを通して独特の作品にしているようです。うまく表現できませんが、私にとっては、「泥の河」をはじめて見たときの感覚とよく似た感動がありました。

特に、「BorderLine」は、放浪する高校生、アル中のタクシー運転手、女子高生、ヤクザ、主婦といった境遇も年齢も異なる5人を、ばらばらに描き、関係付けていくという、不思議な映画です。暗くて、難しい感じはありますが、社会派映画の好きな人は、必見の作品です。

余談ですが、女子高生役は、加古川市出身の前田綾花だったことにもちょっと驚きました。(赤根)

例会選定会議の報告

8月8日に、11月以降の例会作品の候補を選定するために例会選定会議を行いました。いつものように、推薦作品を出し合い、日本、アジア、欧米に分類し、絞り込んでいきました。

11月は、前回の例会選定会議で、有力であった韓国の不思議な戦争映画「トンマッコルへようこそ」となりました。

また、1月は、エルマンノ・オルミ、アッバス・キアロスタミ、ケン・ローチという巨匠監督3人による夢のコラボレーション映画「明日へのチケット」を選びました。

日本映画では、沖縄の石垣島出身の人気バンドBEGINのエッセイをもとにした中江裕司監督の「恋しくて」、上野樹里主演の「幸福のスイッチ」、井筒和幸監督の「パッチギ!」の続編などが競り合った結果、3月に「パッチギ! LOVE&PEACE」を鑑賞することとなりました。

5月までの候補を出し合うところでしたが、5月は、未定とし、今後、考えることとなっています。推薦作品があれば、アンケートなどを使ってお知らせください。

前回例会の報告

7月10日の例会では、「マザー・テレサ」を鑑賞しました。参加会員139人。

【参加者の感想】(抜粋)

- ・オリビア・ハッセーの演技が、真に迫っていた。
- ・「与えることは与えられること」この言葉に感動しました。
- ・マザー・テレサが、寄付も献金も受けずに働くことになったいきさつが少しわかった。音楽も良かった。
- ・感動しました。ありがとう。
- ・心暖まる映画を見せてもらい、有難うございました。いつでも、どこでも、笑顔を忘れないようにします。

ご意見をお待ちしています

映画の感想や意見など、このニュースへ記事をお寄せください。200~300字程度にまとめていただければ助かります。おすすめ作品をファックス、メールや例会会場のアンケート用紙でお知らせください。

加古川シネマクラブ 〒675-0101

加古川市平岡町新在家 752-46 B-313 山本方

TEL 090-9283-0435 FAX 078-935-8528

E-MAIL cinemaclub@nifty.com

<http://homepage3.nifty.com/cinemaclub>

会員数 205人(7月10日現在)